

「御同朋の社会をめざす運動」(実践運動) スローガン

結ぶ絆から、広がるご縁へ

—From tying bonds to great encounters—

2015.03.200,000

vol.4

いのちと
死をみつめて

ごえん

～結ぶ絆から、広がるご縁へ～

浄土真宗本願寺派 (西本願寺)

はじめに

この冊子は、浄土真宗の葬儀の中で大切にされてきた「死を受け容れていく心」をテーマとして、大切な方の死を看取った人のお話や、死を迎えた人が遺された手紙などを紹介しています。

人は、必ず自らの「死」を迎え、あるいは大切な方の「死」と向かい合わねばなりません。しかしそれは一人で簡単にできることではありません。それゆえ人は、その長い歴史の中で、ご縁のある人々とともに「死」と向かい合う「葬儀」という儀礼文化を育ててきました。

葬儀においては、先立たれた方とご縁のある人々が集まり、ともに死を悼みます。ご縁のあった一人ひとりが、先立たれた方との間に、かけがえのない思いや、記憶を持っています。そうしたかけがえのないものを、故人の面影に導かれるように語り合うことで、ご縁で結ばれた人々のあいだに先立たれた方の

死と向かい合う心が共有され、そこに形が与えられていきます。親しい人々の語りが温もりとなって、冷たく深い別れの悲しみに向き合うきっかけが生まれてくるのです。そして、死と向かい合う心が、死別の悲しみを救おうとする仏さまの願いに出あうとき、心に消えない灯りがともされ、人ははじめて死を超えていく大切なものに気付いていきます。

葬儀の場とは、先立たれた方とご縁、故人と出あった人々とのご縁、そして仏さまとご縁という3つのご縁が結びついていくところです。そして、3つのご縁が出あうところに、葬儀の宗教的な意味が生まれてきます。

大切な方の死について語る「かけがえのない思い」を通して、死を受け容れていくことの意味を考え、浄土真宗の教えに出あっていただくために、この冊子を作りました。後半の「お葬儀と浄土真宗の救い」をあわせてお読みいただければ幸いです。

目次

はじめに

- ①お葬儀の準備、心の準備・・・2
- ②父の靴・・・・・・・・・・4
- ③母の手記 生き生まれる・・・6

- ④扉のひとつ向こうへ・・・・8
- ⑤仏さまって、だあれ？・・・10
- ⑥兄さま、姉さまへ・・・・12

- お葬儀と浄土真宗の救い・・・14
- お葬儀
- 阿弥陀如来の救い

- ある別離の風景 ～僧侶のいる病院～ 18
- あとがき・・・・・・・・・・20

お葬儀の準備、 心の準備

手記 60代男性・僧侶



幼稚園の頃からの友人が、ガンをわずらい、65歳で亡くなりました。余命宣告を受けてから、一年ほどの闘病生活でした。几帳面な友人は、葬儀の準備や亡くなった後の手続きを、きちんと自分でしてから亡くなりました。

葬儀の日、少しキザに構えた友人の写真が飾られました。その遺影も、写真スタジオに自らおもむき、撮影してきたものでした。

亡くなる一ヵ月前のこと。

僧侶である私は、入院中の友人に呼ばれ、「けんちゃん、俺の葬儀をやってくれよな。おまえがお経を読んでくれるよな」と依頼されました。友人の前歯は数本欠け、くちびるは白く乾いていました。

思わず「もう少しがんばれよ」と励ましそうになりましたが、表情に死への覚悟がひしと感じられ、「わかったで。どんなことがあっても、俺がお葬式あげたるからな」と応じました。その後、法名ほうみょうのこと、納骨のうこつのことなど、友人の気になっていることを一通り確認し、ご家族に伝わるように二人でメモを作成しました。家族が困らないように準備する姿を見て、几帳面な性格は、幼い頃から変わらないなあと思いました。

そして、いよいよ病室を出る間際。このまま別れて良いのだろうかという不安がよぎり、「死ぬのは辛いかな？」と尋ねました。すると、おだやかだった彼の表情が急にゆがみ、「辛いなあ」とつぶやきました。目を赤く充血させて「心の準備が、一番、難しいなあ」とも言いました。

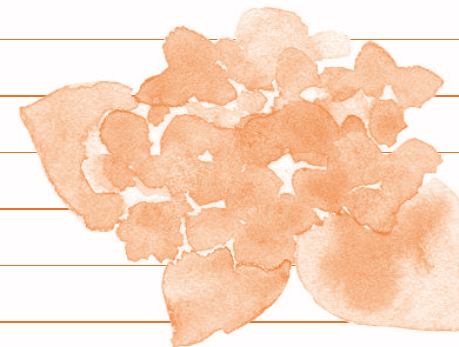
私は、坊さんらしいことを言おうとしたのですが、「辛いなあ……念仏ねんぶつしてくれよ」という一言が、やっとの思いで出ただけでした。

すると、彼は私の目を見て言ったのです。「けんちゃん、念仏したらお浄土へ行けるて、言うてたな。ほんまか？」と。私は、即座に「ほんまや」と言いました。その時、友人は、その日一番の笑顔を見せてくれました。その笑顔は、幼い頃へと時間を巻き戻し、二人でお寺の塀に登り、ザクロを取って食べた記憶がよみがえってきました。

それが、二人の最後の会話となりました。そのときの友人の笑顔は忘れられません。お念仏をしてお浄土へ生まれていくという教えが「心の準備」となるということを友人から教えられましたので、今はそれを大切な糧にして、お坊さんとしての日々を生きています。

父の靴

手記 40代男性



慢性の肺炎が悪化し、母が亡くなりました。入院してから、ちょうど10日目のことでした。

入院して、すぐに病状は悪化し、5日もすると酸素マスクをしていても、普段の7割しか酸素が吸えないようになり、ほとんど一日、ベッドの上で苦しそうに呼吸しているだけとなりました。

そんな中、たまに目を開けて、酸素マスク越しに、二言三言話しかけてきました。亡くなる4日前には、「お父ちゃんに、靴を買ってあげてちょうだい」と言いました。

「お母ちゃん、わかったよ、僕が買うからね」と答えると、「安心した」と言って、目を閉じました。

また20分くらい経って、今度は「お父ちゃんに、スーツも買ってやってちょうだい」と言いました。靴から下着まで、父の着るものは全て母が買いそろえていたので、よほど心配だったのでしょうか。私の妻が「お母さん、私が買うからね」とこたえると、「あ〜、安心した」と言って目を閉じました。

亡くなる2日前。いっそう、呼吸がしづらくなってきました。見ている側も辛くなるほどで、お医者さんがモルヒネを処方しました。点

滴を入れると、母の表情が、見る見るうちに柔くなりました。

よほど楽になったのでしょうか。目を開けて、「お兄ちゃん、病気が良くなったわ。家に帰ろうと思う」と言いました。もう帰れないとわかっていたのですが、嬉しそうにしているので「良かったな、帰ろうな」と言うと、「帰ろう、帰ろう」と満足げに言って目を閉じました。

また20分くらいして目を開けて、今度は「明日帰るんじゃないかな、あさって帰るんじゃないかな」と言いました。私が「明日は急だから、あさってにしようよ」と応じると、母は「あさってじゃった、あさってじゃった」と嬉しそうに言いました。

私は、あまりに母が嬉しそうなので、切なくなり、その場で大泣きしてしまいました。母は、何も言わずに目を閉じました。それから2日後、母は遺体になって、家に戻ってまいりました。

母は、念仏の満ちる生涯を送りましたから、きっとお浄土へ生まれていると思います。お浄土へ生まれると、ご縁があった人々を願い、心配してくださる仏さまになるとご住職がおっしゃってました。今も、父の着るものを心配しているのかなと懐かしく感じています。

母の手記

ゆき う 往き生まれる



手記 80代女性

1月1日

千葉に住む息子、義継よしつぐが同窓会に出席するため、兵庫県西宮市の実家に帰って来た。義継は、昨年食道ガンの手術を受けたが、その後の経過は良いと安心していた。しかし、突然に義継から「肝臓に転移して、6ヵ月の命と宣告された」と聞かされる。

2月20日

義継から電話があった。
「3月になったら、千葉に迎えに来てほしい。今は痛みのため、モルヒネを飲んでいる。葬式は、西宮せんきやうじの善教寺でして欲しい」
仰天した私が「どうして」と聞くと、「往き生まれるのや」と義継が言った。亡くなる25日前のことだった。（「往き生まれる」はお浄土おうじよへ生まれる「往生」のこと）

3月13日

義継はかなり衰弱していた。辛そうだが、私も心を鬼にして、住職に一度会ってもらうために善教寺へ連れて行く。初めて義継と会うご住職は、同年齢である義継の痩せこけた姿に驚かれたと思う。しばらく黙して、静かにゆっくり、やさしく、こう説いてくださった。

「阿弥陀あみださまは、すべての衆生しゆじやうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと届いてくださり、必ず仏に仕上げる、と喚よびかけてくださっているが、その喚び声に気付くか、気付かないかだ。気付いた人生は、たとえ短い人生であっても、尊い人生を生き切ったことになる。気付かない人生は、たとえ90年、100年生きるとも、それはむなしい人生である」

家に帰り、私は「貴方の合掌した姿は、尊かったよ」と言った。義継は、「心安らいだ。気付くことやなあ」と話した。短いながらも、話らしい話をしたのは、これが最後だった。亡くなる50時間ほど前のことだ。

3月15日 午後4時ごろ

「あつし、あつし」。
一人息子をよぶ大きなよびかけを最後に、義継の意識が途絶えた。
あつしは、ベッドの横で父親の右手を握りさすっているのに、私はただうろうろしているだけだった。看護師さんに「お母さん、手を握ってあげてください」と言われ、はっとした。義継の左手を両手でしっかり挟み、いつのまにか「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏……」と称え続けた。

「5時28分です」の声に「ああ、お浄土に参らせていただいたのか」と再び称名念仏させていただいた。

義継が浄土へ参ってから、数ヵ月がたった。
夕陽を眺めているとき、どこからか、「往き生まれるのや」と義継の声が響いているようで、自然にお念仏が出てくださる。

扉のひとつ向こうへ

手記 50代男性・僧侶

私の母は45歳のときに、当時まだ治療が困難であったガンにかかりました。それでも、手術を繰り返し、厳しい治療に耐えて、末期と診断されてからも2年半がんばりました。

病床の母は、高校生だった私に、

「さびしい、さびしい……。死んで行くのはさびしい」

と幾度もつぶやきました。

<家族が、みんな幸せであってほしい>と思い、努力していた母でしたから、若くして死なねばならないことが、とても無念だったのだと思います。最期まで、私たち子どもや父と別れていく辛さを、口にしていました。

そんな母が病床でホッとした表情を見せていたのは、父が見舞う時でした。父は病室に入るといつも、眠っていた母の手を取って「来たよ」と言っていました。その時の母の表情は忘れられません。

早くに連れ合いをなくした父でしたが、85歳までがんばって生きてくれました。75歳を超えた頃から、「死ぬことは、扉ひとつ向こうへいくこと」が、父の口癖となりました。

父も長くお世話になってきた友人の僧侶が、生前に「また いつか会いましょう」という言葉を遺しておられました。お浄土で再び出あっていくという教えを仰ぎながら、人生を生き抜かれた方の、尊く力強い言葉でした。

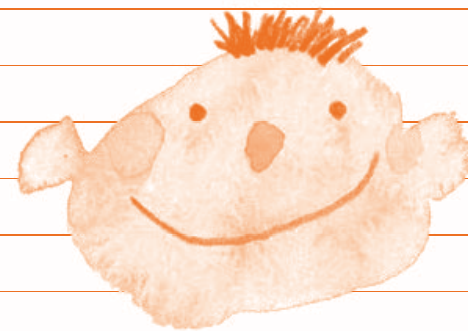
その言葉に出あってから、「扉ひとつ向こうへ」が、特に父の口癖になったように思います。そして「家族も、友達も、皆あちらにいるから」と時々楽しそうに語りながら、85歳で命を終えていきました。

私も、老いや体の不調を思うようになった今、母の思いを痛切に感じます。そしてまた、母との死別の悲嘆を抱えつつ、自らの命の終わりを見つめつづけた父の言葉が、老いの入り口に差しかかった私の道しるべとなってくれています。



仏さまって、だあれ？

手記 70代男性



孫のゆうしは5歳で、いたずら盛りだ。
弟の頭を箒で叩いたり、障子を破ったり、タンスに落書きしたりする。厳しくしつけない気持ちもあるが、祖父の立場はなかなか微妙なところがある。

そんな風なので、成長の跡が感じられるときは、本当に嬉しい。
この前も「ゆうが、おふたを開けてあげるからな」と言って、弟のしょうま（2歳）にアイスクリームを食べさせていた。
5歳になって、ほんとうにお兄さんらしくなったなと思う。

一番嬉しいのは、婆ちゃんのことを憶えてくれていることだ。
妻が死んだのは2歳の時だったから、3年間も忘れずにいてくれるのは有難いと思う。
弟のしょうまが仏壇の前を突っ走ると、「こら、お婆ちゃんが悲しむで」と弟をたしなめる。

また、妻の知り合いが訪ねてくると、お仏壇へ手を引っ張って行って、「お焼香してください。お婆ちゃんが喜ぶますんで」と、大人びたことも言う。

妻は、ご飯の前の読経と念仏を欠かすことがなかった。妻が仏さまに向かってお経をあげている時、一緒に「ナモアミダブツ」と称えて焼香していたことが、きっと良いしつけになったのだろう。

ゆうしは、妻の初孫だったので、妻が大変に可愛がった。
最後は肺炎で亡くなったのだが、肺炎は興奮すると呼吸が乱れて苦しむ。嬉しくても興奮するので、ゆうしが病室に来ると、呼吸が乱れ30分ほど苦しむことになる。それでも孫が来ることを、とても楽しみにしていた。

だからだろうか。まるで生きていた時のように、どうしたらお婆ちゃんが喜ぶかなと感じてくれているように思える。

先日、ゆうしが仏壇の前にぼーっと正座していたので、私もしつけをと思い

「婆ちゃんは、仏さまになって、ゆうしをずっと見てくれているんだよ」

と言うと、ゆうしが「仏さまって、だあれ？」と聞いてきた。

今度、ご住職に質問してみようと思う。

兄さま、姉さまへ

手紙 20代女性

尊いお品をお送りくださいました時、私は連日の不安と寂しさと、生命に対する執着とに悩みもだえ苦しみ、流すまじき涙を、ともすれば枕の上にしとど濡らしてみた日の午後でございます。

11月に入った頃より、どんどんと病は進んで来ました。熱の上に我が身の衰弱の程度に、私はやっぱり死にたくないと一人泣きましたよ。

私は、そして死を見つめました。死は淋しいことだったのです。私をとりまくしたい親、兄姉弟を思ふ心、別れる心のつらさ。しかしながら、必ず生きねばならぬ重要な我が身であらうか。私が死んだとて、別に困る人がないのです。時折、こうしたことを少しづつ母の来るたびに、すまぬと思ひつゝ話しては、母を泣かせました。

その頃ぼつぼつ夜具が重くて、身動きする毎に疲労を僅少ではありましたが、覚えてみた私へ、姉さまから柔らかくて軽くて華やかな夜具を恵まれ、私はただ勿体なく思ふのみでした。色合が上品で、好きな色のみです。兄さまと二人してきっと色をきめてくださったのだらうと、喜び喜び柔らかい軽い中に、安静をいたして居ります。兄さま、

ほんとにどんなに嬉しかったでせう。体が楽になった様にさへ思はれましたものを、喜びの表現の下手な私も、この時ばかりは、喜びの表現で一ぱいでした。見て頂きたかったと思ひます。

でも兄さま姉さま、きっとよくなりますよ。よくならせて頂きます。どんな未来が来ようが、私はもう恐れません。生きることの尊さ、有難さ、生きることに喜びをこよなく感じます。ただただ仏さまの御手の内にあることの仕合わせを、静かな心持でしみじみと喜ばせて頂いて居ります。

兄さま、姉さまにも随分と昨年此の方、種々と御心配やらお世話をおかけ申したことでした。お礼を申しあげ切れませぬ。どうぞ今静かな心でやすませて頂く私を喜んでくださいませ。

合 掌

昭和8年12月24日 三千代

昭和9年4月11日 往生 行年23歳



お葬儀と 浄土真宗の救い

お葬儀

大切な方との別れは、悲しく辛いものです。言葉では、とても表現し尽せない寂しさがあります。私たちは、そうした死別の悲しみから、葬儀を執り行い、一人ひとりの方の死を大切にしてきました。

葬儀の場では、先立たれた方々の思い出が語られ、故人のお人柄を偲びつつ、儀礼が執り行われていきます。その儀礼や語りを通して、限りある命を生きているという事実に向かい合い、大切な方の死の悲嘆が受容されてきました。

葬儀に参列されたご縁の方々の「とても優しい方でした」「困った

ときに助けてくれたんですよ」「歌がとても上手でしたよね」といった言葉は、大切なあの人が多くの人々の心に生き続けていると感じさせてくれます。まさしく宝物のような言葉です。しかし、そうした温かい言葉によっても、埋め尽くすことのできない大きな悲嘆や不安が、死別の中では生まれています。釈尊しゃくそんは、この愛別離苦あいべつりくの悲しみ・諸行無常しよぎょうむじょうの不安を受けとめていくためのものとして、浄土の教えを私たちに残してくださいました。

阿弥陀如来の救い

阿弥陀如来という仏さまは、どのようにしたら、あらゆる人々が「しあわせ」になれるだろうかと考え、願いを立てて修行され、「お浄土」を用意してくださいました。なぜ、お浄土が私たちにとって救いとなり、しあわせをもたらすのでしょうか。

阿弥陀如来のお浄土は、お念仏によって、誰もが生まれていくことのできる世界です。お浄土へ生まれると、私たちは仏となります。仏になるとは、慈悲の心で、あらゆるものを救おうとしつづける方にな

るということです。つまり、私たちは、この世でのいのちが終わると、阿弥陀如来のはたらきによってお浄土へ生まれ、あらゆるいのちを救おうとする仏になるのです。ですから、お葬儀はお別れ会なのではありません。仏教の視点からいえば、むしろ、仏さまとの新たな「ご縁」を結んでいくための場所なのです。

お葬儀の場では、さまざまな「つながり」を実感することができます。

参列された方々といっしょにお念仏を称える時、先立たれた方を思う気持ちがお念仏の声の中で一つとなり、仏さまを通して、互いにつながり合っていることを実感します。

また、先立たれた方は、仏さまとなって私たちのしあわせを願ってくださっているのですから、「死」によって断ち切られることのない「ご縁」でつながっていると感ずることができます。あらゆるものを救おうと願う慈悲のはたらきとなって、今まさに私たちを包んでくださっているのですから。

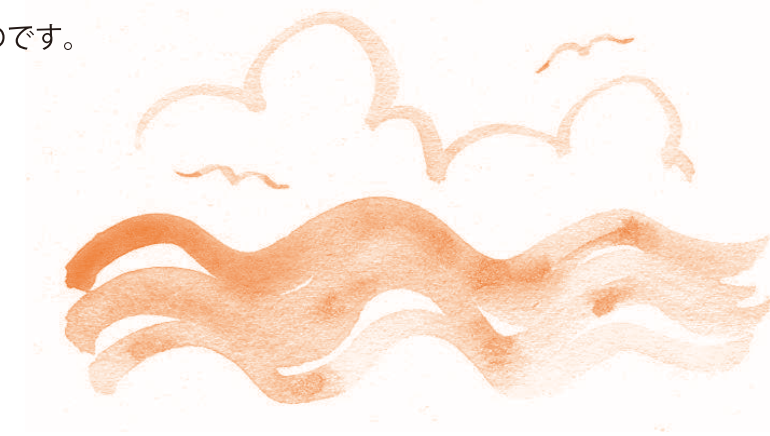
このお念仏によるつながりは、すべて阿弥陀如来の願いによるものですから、今ここで、私自身が阿弥陀如来とつながっているという

「ご縁」にも気付いていくことができます。

このように、私たちが仏さまの願いの中にあることを知らされ、そのはたらきをそのまま受けとめていくことを「信心しんじん」といいます。信心とは、阿弥陀如来の願いの中にいる自分の存在に気づき、阿弥陀如来の救いに身をゆだねていくことなのです。

大切な方との死別を経験すると、私たちは悲嘆にくれます。この苦しみを釈尊は「愛別離苦」と説かれました。その悲嘆は、つながりが切れることに由来しています。しかし、本当のつながり、つまり仏教でいう「ご縁」とは、私たちが簡単に断ち切れるようなものではなく、仏さまによって永遠のつながりとして与えられているものなのです。

そのつながりを「ご縁」としていただいていく中に、死別の深い悲しみが、温もりによって包まれていたのだと受けとめていく道が開かれていくのです。



ある別離の風景 ～僧侶のいる病院～

京都に、「あそかじハーラ病院」という本願寺派の終末期医療の施設があります。玄関を入ると、すぐ左側のいちばん良い場所に、らいはいしせつ礼拝施設が設けられています。

天井からは、優しい光りが注いでいます。正面には、仏像が置かれています。そこで、お茶やお菓子をいただくこともできます。

この病院で亡くなられた方は、地下に設置された霊安室のような場所に運ばれるのではなく、このお部屋に入られます。そして、ご家族、ご友人、一緒に入院されている方々、医療スタッフ、ここで働くお坊さんなど、先立たれた方にご縁のあった多くの人々が、互いに思い出を語り合い、悲しみに寄り添い合いながら、ゆっくりとお別れの時間を過ごします。ご依頼があれば、僧侶スタッフが読経や法話を行います。限りあるいのちを精いっぱい生きてくださった方々に心より感謝し、限りなき永遠のいのちに目覚めていくことが、ここでは大切にされているのです。

このお部屋の風景のように、先立たれた方とのご縁、故人と出あった人々とのご縁、仏さまとのご縁——「3つのご縁」を葬儀という場で大切につなげていきたい。お葬儀の持つ大切な意味をきちんと確認できれば形ばかりのお葬儀になることはないでしょう。

お互いで悲しみを受けとめ合い、心の安らぎに通じる道が拓かれひらていきます。



あとがき

現代の葬儀は直葬や家族葬など簡素化の傾向にあり、埋葬形式も“樹木葬”や“宇宙葬”といったように多様化しています。

葬儀の形、埋葬の方法に変化が生まれている現代、長い歴史の中で培われてきた葬儀の本来の意味が問いなおされ、きちんと伝えられていく必要があるといえます。

僧侶向けに作成された『「浄土真宗本願寺派 葬儀規範」解説—浄土真宗の葬送儀礼—』では、葬儀の意義について以下のように説明しています。

仏教において「葬送儀礼」というのは、近親者の「死」を通して、遺されたものが故人を偲び、改めて生前の厚情に感謝の気持ちを表す場であり、また、慌ただしい日常生活の中で、^{しんし}真摯に振り返ることのできなかつた無常の道理を知らされる場でもあります。そして、何より重要なことは、合掌するご縁の無かつた方々に、^{ぶつぽう} 仏法を聴聞する^{ちやうもん} という機会が訪れているということです。

こうした葬儀の本質が見失われていく今だからこそ、葬儀が多くの方々が仏法と出あうご縁となるようにしていただきたいと思い、この冊子を作成しました。

今回の冊子では、死の語りを通して葬儀の意味を考えてきましたが、その他に、葬儀の作法、歴史や儀式などについての資料も、本願寺派から発行されておりますので、そちらもぜひ、ご参考になさってください。

「浄土真宗の葬儀の意義や方法を知りたい場合」

・入門編

『浄土真宗 新・仏事のイロハ』

『浄土真宗 マンガ仏事入門—おしえて法事・葬式・お仏壇—』

・詳しい解説

『「浄土真宗本願寺派 葬儀規範」解説—浄土真宗の葬送儀礼—』



◇この冊子を読んでくださった方へ

大切な方の「死」にまつわるエピソードや心に残る葬儀を教えてください。ご協力をお願いいたします。

<宛先>

〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派
重点プロジェクト推進室
TEL 075-371-5181 (代表) FAX 075-351-1372
メールアドレス project@hongwanji.or.jp

◇浄土真宗本願寺派の寺院の方へ

重点プロジェクト推進室では、葬儀に関して全国各地の寺院・組で作成されている冊子や資料、またはさまざまな事例を集約しています。

ご協力をお願いいたします。

編集・発行 浄土真宗本願寺派総合研究所・重点プロジェクト推進室
印刷 東洋紙業株式会社